

F Two

オペレーティングマニュアル

GENELEC®



F Two アクティブサブウーファー



概要

Genelec F Twoは、最大5台までのG OneまたはG Twoアクティブラウドスピーカー、および、それより若干大型となるG Threeペアを補完する、極めてコンパクトなアクティブサブウーファーです。また、2台のF Twoをリンクさせることで、G Fourと共に使用することができます。F Twoはシステムの低域レスポンスを27 Hzまで拡張し、あらゆる環境でメインラウドスピーカーと完全に統合します。システム全体の再生レベルは、サブウーファーと共に提供されるワイヤレスボリュームコントロールによってコントロールすることができます。オプションとして、有線ボリュームコントロールも使用することが可能です。

F Twoには2つの出力チャンネルに対する内蔵ベースマネジメントが搭載されており、85 Hzを下回る周波数帯域をサブウーファーに、それを上回る帯域を出力コネクタを通じてメインのラウドスピーカーに伝送します。マルチチャンネルシステムの.1/LFEチャンネルにサブウーファーを使用する場合、プロセッサまたはレシーバーでベースマネジメントを実行し、LFEチャンネルのみをサブウーファーに接続することをおすすめします。

設置

オーディオ信号を接続する前に、全ての機器の電源がオフになっていることを確認します。F Twoには独自のアンプが内蔵されているため、別途パワーアンプは必要ありません。F Twoは、パワーアンプ、内蔵アンプ、レシーバーのラウドスピーカー出力には絶対に接続しないでください。

サブウーファーを正しく設定するためには、次の手順に従ってください。

1. 同梱内容を確認します。サブウーファーに加えて、ワイヤレスリモートコントロール、メインケーブル、IR延長ケーブル、クイック設定ガイドが含まれています。
2. 電池の絶縁ストリップを引っ張って、リモートコントロールから取り除きます（図1参照）。このストリップは電池とリモートコントロールの接点との絶縁用で、これを取り除かなければリモートコントロールは機能しません。
3. サブウーファーを設置場所に配置します。
4. 信号ソースからオーディオケーブルを接続します。最大で、デジタルオーディオソース2系統とアナログオーディオソース2系統をF Twoへ接続できます。
5. メインのラウドスピーカーをサブウーファーの出力コネクタに接続します。バランスXLRまたはアンバランスRCAコネクタのいずれかを使用できます。
6. このマニュアルの4ページめに記載される表2に従って、サブウーファーとメインラウドスピーカーの [LEVEL +10] と [-10 dB] スイッチを設定します。
7. このマニュアルおよびクイック設定ガイドの指示に従って、サブウーファーの位相を調整します。
8. テスト音源やよく知っている楽曲を使用して、サウンドバランスを判断します。[SUBWOOFER LEVEL] ロータリーコントロールと [BASS ROLL-OFF] DIPスイッチを使用してバランスを微調整します。
9. 上手くいかない場合、サブウーファーの配置の変更を検討してください。

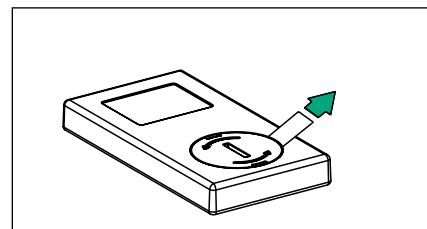


図1：電池の絶縁ストリップをリモートコントロールから取り除く

動作環境

F Twoサブウーファーは室内でのみ使用するようデザインされています。動作温度範囲は15～35℃で、相対湿度は20～80%です。結露のないようにしてください。低温環境で保存または輸送した後に温かい部屋に運び入れた際は、製品が動作温度まで温まるのを待ってから箱を開けて主電源に接続してください。

コネクタ

F Twoにはアナログとデジタル両方の信号入力コネクタが装備されており、最大4系統のオーディオソース（2 x アナログ、2 x デジタル）を同時接続することが可能です。ソース間の切り替えは、コネクタパネルのセレクトボタン、またはリモートコントロールの [<] と [>] ボタンで行います。サブウーファーエンクロージャーに付いているLEDライトの色は、選択されているソースを示します。

アナログ入力コネクタ

F Twoには2つのステレオ入力（3.5mmジャックとL/R RCAコネクタ）と1つのLFE/LINK RCAコネクタがあります。ステレオ入力はパラレル接続で、2系統のオーディオソースを同時に接続することができます。（一

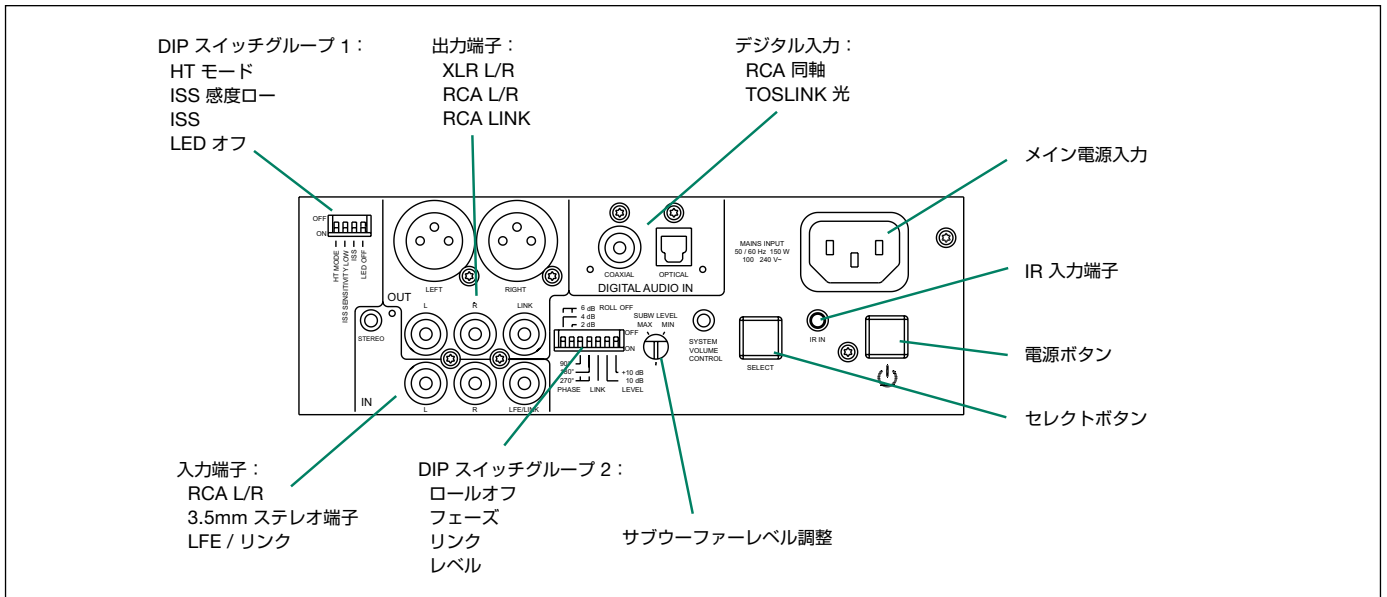


図2：F Twoのコネクターとコントロール

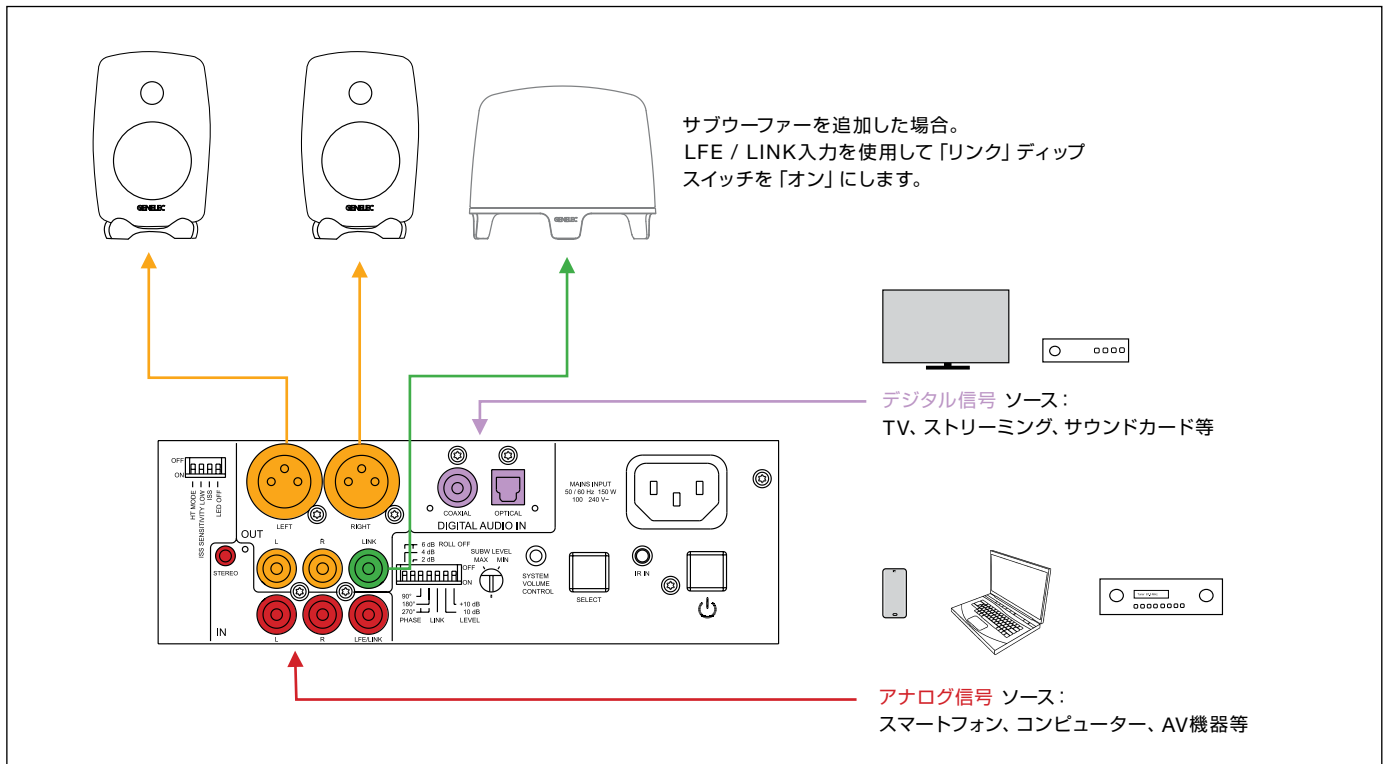


図3：オーディオ配線

度に再生できるのは1系統のみ)。この場合、2つのアナログ入力の切り替えは出来ません。LFE/LINK入力は2.1または5.1チャンネルのサウンドシステムにおけるLFE(.1)信号に対して、または、複数のサブウーファーを使用するシステム(「複数のサブウーファーを使用する」章参照)の信号入力として使用されます。LFE/LINK入力には120 Hzローパスフィルターがあるため、フル周波数帯域信号には適し

ていません。

デジタル入力コネクター

F Twoには2つのデジタル信号入力コネクターがあります。1つはコアキシャル、もう1つはオプティカルで、ステレオのPCMフォーマットのデジタル信号を受信します。2系統のデジタルソースを接続し、選択機能を使用してその間を切り替えることができます。

アナログ出力コネクター

F TwoはアナログステレオL/R出力コネクター2ペアを搭載しています。1つはRCAコネクター、もう1つはバランスXLRオスコネクターです。信号ケーブルをこれらのコネクターからメインスピーカーに接続します。いずれのコネクターも同じ信号を伝送するため、RCAまたはXLRいずれかの入力コネクターを使用し

サブウーファー 設置	ベースロールオフ
壁際	-2 dB
隅に	-4 dB

表 1：一般的な状況下での推奨ベースロールオフ設定

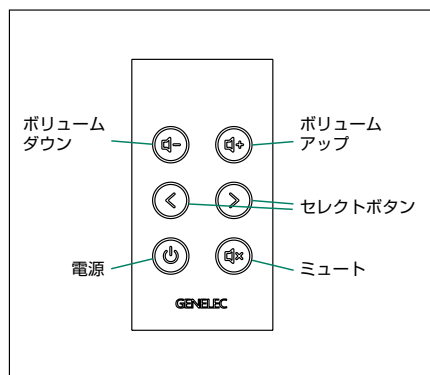


図 4：F Two リモートコントロール

てメインスピーカーを使用できます。これらの出力には、85 Hz ハイパスフィルターがかかります（「簡易の位相調整方法」の章参照）。さらに、LINK RCA 出力は両チャンネルの合算信号を提供します。複数のサブウーファーを一緒に接続したい場合、このコネクタを次のサブウーファーへの信号出力として使用します。詳しくは、「複数のサブウーファーを使用する」の章をご参照ください。

【IR IN】コネクター

F Two を赤外線タイプリモートコントロール（「IR リモートコントロールをマッチングする」の章参照）と一緒に使用する際、サブウーファーの設置場所によっては足元の LED 横のレシーバーまでの見通し線を確保できないことがあります。その場合、サブウーファーに付属の IR 延長ケーブルをここに接続し、ケーブルの受信側の端を、IR リモートコントロールが受信できる位置に配置することで、この問題を解決することができます。たとえば、サブウーファーとスピーカーをテレビと一緒に使用する場合、テレビの IR 受信部の近くなどに配置します。

機能とコントロール

HT モード

独自のボリュームコントロールを持つサウンドソースを F Two のアナログ入力に接続する場合、このスイッチを [ON] に切り替えます。このモードにすると、F Two のボリュームコ

メインラウドスピーカーモデル	F Two レベル DIP スイッチ設定	
	-10 dB スイッチ	+10 dB スイッチ
G One A	OFF	OFF
G One B	OFF	OFF
G One B -10 dB Dip ON	ON	OFF
G Two A	OFF	OFF
G Two B	OFF	OFF
G Two B -10 dB Dip ON	ON	OFF
G Three A	OFF	OFF
G Three A +10 Dip ON	OFF	ON
G Three B	OFF	OFF
G Three B -10 Dip ON	ON	OFF
G Four A	OFF	OFF
G Four A +10 dB Dip ON	OFF	ON
8010A	OFF	ON
8010A -10 dB Dip ON	OFF	OFF
8020A	OFF	ON
8020B	OFF	ON
8020C	OFF	ON
8020D	OFF	ON
8030A	OFF	ON
8030B	OFF	ON
8030C	OFF	ON
8040A	OFF	ON
8040B	OFF	ON
M030	OFF	ON

表 2：さまざまなメインラウドスピーカーでのレベルスイッチ推奨設定

ントロールは、アナログ信号で効果を生じません。ただし、デジタル入力でのボリュームコントロールは機能します。

ISS 低感度

Intelligent Signal Sensing (ISS) 機能によって、オーディオ信号がないのにサブウーファーがオンに切り替わってしまう場合、このスイッチを [ON] に切り替えて ISS 機能のトリガー感度を下げることができます。

ISS

Intelligent Signal Sensing (ISS) 機能は

サブウーファーに供給されるオーディオ信号をモニターします。約 45 分間にわたり信号がない場合、サブウーファーは ISS 機能によりスタンバイモードへ切り替わり、電力消費が 0.5W 未満に下がります。信号が再開すると、サブウーファーの電源が戻ります。自動電源オンにはわずかな遅延が生じます。サブウーファーを常時オンにしておく必要がある環境では、[ISS] スイッチを [OFF] の位置に設定することで、ISS™ 機能を無効にすることができます。この場合、サブウーファーの電源はオンのままとなり、リモートコントロールまたはコネクターパネルの電源ボタンを使用してオフにします。

LEDオフ

このスイッチは、サブウーファースの足元のステータスインジケータ LEDを無効にします。

ロールオフ

これら2つのスイッチで低域を減衰させます。減衰レベルは-2 dB、-4 dB、-6 dB (両方のスイッチをオンにする)です。

位相

これら2つのスイッチは、-90度単位でのサブウーファースの位相調整を提供します。「位相調整」の章をご参照ください。

リンク

このスイッチで、アナログ入力を選択され、入力チャンネル選択が無効になります。さらに、このスイッチはリモートコントロールを無効にし、サブウーファースのレベルを最大に設定します。複数のサブウーファースを使用するシステムで「スレーブ」として使用する場合、このスイッチを [ON] に設定します。「複数のサブウーファースを使用する」の章をご参照ください。

レベル

これら2つのスイッチでは、サブウーファースのレベルを-10 dBまたは+10 dB単位で調整でき、さまざまなメインスピーカーモデルとのレベルマッチングを提供します。例については表2をご参照ください。

サブウーファースレベル

このロータリーコントロールでは、サブウーファースの再生レベルを調整します。レベルは、コントロールを右に回すと上がり、左に回すと下がります。

セレクト

このボタンでは入力信号を選択することができます。また、お使いのテレビ等のIRリモートコントロールの学習設定をすることも可能です。

電源

このボタンで、サブウーファースをスタンバイと電源オンとの間で切り替えます。このボタンでサブウーファースを主電源から完全に切断することはできません。その必要がある場合は、サブウーファースのメインケーブルを取り外す必要があります。このボタンは、10～15秒間押し続けることでファクトリー設定の復元にも使用できます。こうすることで、リモートコントロー

ルのボリューム設定がファクトリーレベルに戻り、リモートコントロールのペアリングとIRリモートコントロールのマッチングが削除されます。ソース選択は自動(ファクトリー設定)に戻ります。

室内での配置

室内でのサブウーファースの配置は、サブウーファースの周波数特性やサウンドレベルに大きく影響します。これは、室内音響は低域に強く影響を及ぼすためです。サブウーファースの位置をわずかに変更しただけで周波数バランスに大きな違いが生まれますが、最適な配置を見つけるには、秩序立てた試行錯誤が必要となります。

サブウーファースの配置は、ベースロールオフ率と、メインのラウドスピーカーとサブウーファースとの間の位相の差異に影響します。こうした影響は、サブウーファースのコントロールを使用することで補正できますが、Genelecでは、まずスイッチは触らず、サブウーファースが最もスムーズなレスポンスを提供する位置を探すことに集中することをおすすめしています。位置調整を行ったあとで、コントロールを使用してサブウーファースとメインのラウドスピーカーの間のバランスと位相調整を微調整しましょう。まず、サブウーファースを前壁の中央近くに配置します。壁からの距離が60 cm未満になるようにすることをおすすめします。この位置だと、壁や床からの距離が近くなり、音響負荷および音圧レベルが上がります。理想的には、サブウーファースとメインのラウドスピーカーがリスニング位置から同じ距離で対称になるよう配置します。

周波数特性のバランスがうまく取れていないように感じられる場合、サブウーファースを壁に沿って左または右に動かします。サブウーファースを部屋の隅の近くに配置すると、低域のレベルがブーストされますが、低域のサウンドイメージが非対称になることがあります。

ISS™ 自動スタート

自動省電力機能 ISS (Intelligent Signal Sensing) は、コネクタパネルの [ISS] スイッチを [ON] に設定することで有効にできます。再生が終了して一定時間が経過すると、自動で電源がオフになりスタンバイモードに入ります。スタンバイモード時の電力消費量は通常0.5W未満です。再生はソースからの入力信号が検出されると自動的に再開されます。

別の方法として、リモートコントロールのいずれかのボタンを押すとサブウーファースがアクティブになります。

自動電源オンにはわずかな遅延が生じます。ISS™機能が不要な場合、コネクタパネルの [ISS] スイッチを [OFF] に設定することで無効に切り替えることができます。この場合、サブウーファースの電源のオン/オフはリモートコントロールまたはコネクタパネルの電源ボタンで切り替えることができます。

[ISS SENSITIVITY LOW] スイッチでISS™機能のトリガー感度を下げます。このスイッチは、オーディオ信号がないのにサブウーファースが立ち上がる場合に必要となります。

再生レベルを設定する

[LEVEL +10 dB] と [LEVEL -10 dB] スイッチおよび [SUBWOOFER LEVEL] レベルコントロールは、サブウーファースの再生レベルとメインのラウドスピーカーをマッチさせるのに使用できます(表2参照)。微調整はこのロータリーノブで行えます。

ベースロールオフスイッチを設定する

サブウーファースの音響レスポンスは、サブウーファースが使用される室内の音響特性と配置に合致している必要があります(表1参照)。特性に合わせてサブウーファースを調整するには、コネクタパネルにある [BASS ROLL-OFF] コントロールスイッチを使用します。ロールオフスイッチが [OFF] の場合、フラットな特性が得られます。

位相コントロールを設定する

メインのラウドスピーカーとサブウーファースの間で位相が正しく調整されていないと、メインのラウドスピーカー/サブウーファースのクロスオーバー周波数でシステム全体のオーディオレベルが下がる原因となります。リスニング位置でのラウドスピーカーとサブウーファースの間の位相の差異は、リスナーからモニターラウドスピーカーの距離に相対するリスナーからサブウーファースの距離に依存します。左および右のラウドスピーカーとサブウーファースにおける位相の差異を避けるには、サブウーファースをフロント・ラウドスピーカー列の中央近くに配置します。

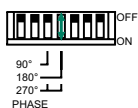
2つの位相合わせスイッチで不正確な位相調整を補正できます。0°から-270°の範囲で4種類の設定が提供されています。

簡易の位相調整方法

メインのラウドスピーカーが対応する [OUT] コネクターに接続されるサブウーファースの信号入力に、オーディオ周波数信号ジェネレーターを接続します。ラウドスピーカーがそれぞれリスニング位置から別の間隔で配置されている場合、近い方を使用します。ジェネレーターを 85 Hz に設定します。信号ジェネレーターが使用できない場合、70 Hz ~ 100 Hz の範囲の周波数のテストオーディオを使用することができます。適切なテスト信号は www.genelec.jp から入手できます。一部のスマートフォンにも内蔵されています。

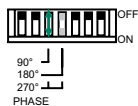
-180° 位相スイッチをオンとオフで切り替えて、リスニング位置でサウンドレベルが最も低くなる位置に設定します。

次に -90° 位相スイッチをオンとオフで切り



替えて、もう一度サウンドレベルが最も低くなる位置に設定します。

最後に、-180° 位相スイッチを真逆に設定します。



IR リモートコントロールを マッチングする

F Two サブウーファーは、ほとんどの IR リモートコントロールと共に使用できます。たとえば、固定レベルのデジタル信号入力経由でテレビのリモコンを接続して便利に使用することができます。サブウーファーを裏返し、サブウーファーの入力セレクトボタンと、サブウーファーの足元のステータスインジケータ LED が見えるようにします。IR レシーバーは LED にあります。サブウーファーに付属する RF リモートコントロールのセレクトボタンでは、学習させることはできませんのでご注意ください。

学習の手順は次のとおりです。

- ・ステータスインジケータ LED が赤に点滅を始めるまで、サブウーファーの選択ボタンを押し続けます。
- ・「ボリュームを上げる」機能の作動に使用するリモートコントロールのボタンを選択します。

LED が点滅しなくなるまで押し続けます。リモートコントロールによっては、ボタンを数回押すと上手くいくものもあります。

- ・ LED が緑に点滅し、「ボリュームを下げる」ボタンを選択可能であることが示されます。上記の手順に従って行います。
- ・ 次に、LED が青に点滅し、セレクトボタン用のボタンを選択可能であることが示されます。
- ・ 黄の LED はミュートボタンの選択を示します。
- ・ 赤の LED は電源ボタンの選択を示します。

上記すべてのコマンドを学習させたくない場合、セレクトボタンを短く押すことで手順を 1 段階省くことができます。手順を中断したい場合、セレクトボタンを 2 秒間押し続けます。これで、それまでの設定が保存されます。設定を保存したくない場合、電源ボタンを 2 秒間押し続けます。これで、それまでに行った学習設定も削除されます。学習させるボタンを変更したい場合、学習の手順をやり直します。

RF リモートコントロールをサブ ウーファーに学習させる

F Two サブウーファーと共に提供されるリモートコントロールは、他の F Two サブウーファーとも機能します。これが不要な場合（リモートコントロールの範囲内に複数の F Two サブウーファーがあり、2 台以上のサブウーファーがリモートコントロールのコマンドに反応する状況避けたい場合など）は、リモートコントロールを 1 台のサブウーファーとのみ動作するよう学習させることができます。

1. LED が白に点滅を始めるまで、サブウーファーの電源ボタンとセレクトボタンを押し続けます。
2. LED が点滅している間に、まずリモートコントロールのボリューム「+」ボタンを押し続けてから、次にボリューム「-」ボタンを押します。両方のボタンを数秒間押したままにすると、サブウーファーの状態インジケータ LED の点滅が止まります。これは学習完了を示し、マッチング手順は自動終了します。

サブウーファーは学習したリモートコントロールによるコマンドにのみ反応し、学習したリモートコントロールは他の F Two ユニットとは連動しません。LED が点滅している間に学習手順をキャンセルするには、サブウーファーの電源ボタンを 2 秒間押し続けます。学習を完

全に取り消すには、サブウーファーの電源ボタンを 10 秒間押し続けます。

注：ローカル Wi-Fi ネットワークと RF リモートコントロールが同じ波長で動作している場合、問題が生じることがあります。このような場合、IR リモートコントロールを使用することをおすすめします。

複数のサブウーファーを使用する

Genelec F Two サブウーファーには [LFE/LINK] 出力コネクターが装備されており、このサブウーファーを G Four アクティブラウドスピーカーと一緒に使用する場合など、高 SPL 用途として 2 台以上のサブウーファーを簡単に連結させることができます。下の説明どおりに接続することで、「マスター」サブウーファーから、このコネクターを介してマスターサブウーファーにリンクしている全てのサブウーファーのボリュームをコントロールできます。

メインラウドスピーカーが接続されている「マスター」サブウーファーの [LINK] コネクターから、その他（「スレープ」）のサブウーファーの [LFE/LINK] コネクターに RCA ケーブルを接続し、「スレープ」サブウーファーの [LINK] DIP スイッチを [ON] にします。

[LINK] モードでは、サブウーファーのボリュームは自動的に最大に設定され、「スレープ」サブウーファーはリモートコントロールによる電源オン/オフのコマンドにしか反応しません。「マスター」サブウーファーでなされたボリューム調整とソースチャンネル選択にのみ従います。

この方法でサブウーファーが 2 つ接続される場合（それぞれが近くに配置されている場合）、ベースレベルは 6 dB 上がります。1 台のサブウーファーと比較して、3 台のサブウーファーでは SPL が 9.5 dB、4 台では 12 dB 上がります。

サブウーファーが音響上全く異なる位置（1 つが一方の隅、もう 1 つが別の隅など）に置かれているのでない限り、[SUBWOOFER LEVEL] ロータリーノブは「マスター」のサブウーファーと同じ位置に設定するべきです。この場合、各サブウーファーのラウドネスを個別に測定し、適切なバランスとなるよう調整することをおすすめします。

[PHASE] と [BASS ROLL-OFF] は、チェーン内の各サブウーファー（特にサブウーファー同士が近くに配置されていない場合）に対して個別に調整します。「マスター」サブウーファーの位相調整を確認するには、「スレープ」サブウーファーの電源をオフにして、「簡易の位相調整方法」の章の説明に従います。

「スレープ」サブウーファーの位相を調整す

るには、「マスター」サブウーファーの電源をオフにして、いずれかの「スレープ」サブウーファーの出力コネクタから対応するラウドスピーカーへ信号ケーブルを接続し、[LINK]スイッチを「OFF」に切り替える必要があります。これにより、「スレープ」モードから「マスター」モードに切り替わり、位相調整を実行できるようになります。調整完了後は、接続を元に戻し、「スレープ」サブウーファーの [LINK IN] 設定を「ON」に戻します。

安全性についての検討事項

Genelec F Twoは国際安全基準に準拠しています。安全な動作を確保し、装置を安全な動作条件下に保つため、以下の警告と注意を順守する必要があります。

- ・アースのない電源ケーブルまたは保護されたアースなしの電源接続を用いて本製品を使用してはいけません。人身傷害の原因となることがあります。
- ・電池が正しく交換されないと、爆発の危険があります。必ず同一または同等のタイプを使用して交換してください。
- ・電池を直射日光や火などの過熱に曝さないでください。
- ・保守および修理を認定サービス以外の者が実施してはいけません。
- ・認定サービス以外の者がサブウーファーを解体することは固く禁じられています。
- ・サブウーファーを水または湿気に曝さないでください。花ピンなど液体で満たされた物体をサブウーファーの上や付近に置かないでください。

なお、主電源ケーブルがアンプまたは電源コンセントから取り外されていない場合は、本機のアンプはAC電源から完全には接続解除されません。

警告！

この装置は 85 dB を上回る音圧レベルを生成できますが、このレベルは聴覚に恒久的な損傷を与える場合があります。

FCC 規則への準拠

リモートコントロール

本製品は、FCC 規則のパート 15 に準拠しています。動作は次の 2 条件に基づきます。

(1) 本機器が有害な妨害の原因とならないこと、および (2) 本機器が不要な動作の原因となる妨害を含むあらゆる妨害を受信すること。本製品は無線周波エネルギーを放射しますが、本デバイスの出力は FCC 規則の無線周波曝露限界値以下です。本装置は制御されていない環境に対して規定された FCC RF 放射曝露限界値に準拠しています。とはいえ、デバイスは、通常動作時に人体との接触の機会を最小限に抑える方法で使用してください。

準拠の責任を負う当事者によって明示的に許可されていない変更を行うと、装置を操作する権限が無効になる場合があります。

サブウーファー

本製品は、FCC 規則のパート 15 に準拠しています。動作は次の 2 条件に基づきます。

本機器が有害な妨害の原因とならないこと、および本機器が不要な動作の原因となる妨害を含むあらゆる妨害を受信すること。

注：本装置は、テストの結果 FCC 規則のパート 15 に従い、クラス B のデジタルデバイスの制限を遵守していることが確認されています。これらの制限は、住宅に設置するにあたり有害な妨害に対する適切な保護を提供することを目的としています。本装置は無線周波エネルギーを発生、使用、放射しており、指示に従わずに設置または使用された場合、無線通信への有害な妨害の原因となる場合があります。ただし、特定の場所に設置することによって妨害が発生しないという保証はありません。本装置がラジオやテレビの受信の有害な妨害の原因となる場合は（装置電源をオン・オフすることでご確認いただけます）、以下の対策を 1 つ以上行って妨害を正すことをおすすめします。

- ・受信アンテナの向きまたは場所を変更する。
- ・装置と受信機の距離をさらに空ける。
- ・受信機が接続されているコンセントとは別のコンセントに装置を接続する。
- ・取扱店または経験豊富なラジオ技術者またはテレビ技術者に相談する。

製造者によって明示的に許可されていない変更を行うと、装置を操作する権限が無効になる場合があります。

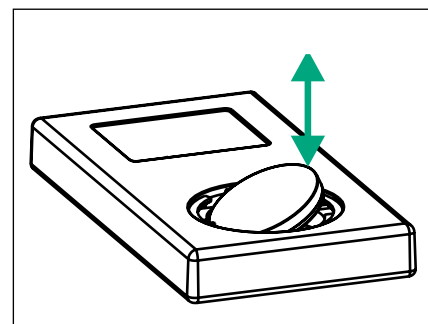


図 5：リモートコントロールの電池を変更する

リモートコントロールの電池を変更する

リモートコントロールの電池は、リモートコントロール背面の電池カバーを左に回すことで交換できます。小さなねじ回しを使用してバッテリー右側に差し込み、電池を取り出します（図 5 参照）。CR2032 タイプの電池を使用して交換します。図 5 のとおり、まず電池の左側を差し込み、電池カバーを閉じます。

使用済み電池はリサイクル回収に出してください。電池を一般ごみに混ぜて捨ててはいけません。

メンテナンス

サブウーファー内部にオーナー自身で点検修理が可能な部分はありません。ユニットの保守を認定サービス以外の者が実施してはいけません。

保証

この製品には、ユニットの性能に変化を与える可能性のある製造上の過失や不具合に対して、2 年の保証期間が付帯します。

システム仕様	
	F Two
フリー空間周波数特性 (-6 dB)	メイン 27 Hz...85 Hz LFE 27 Hz...120 Hz
30～85 Hz を平均した短期正弦波最大音圧出力、軸上、半空間、1 m	103 dB
残留ノイズレベル、半空間、軸上、1 m (A特性)	≤ 15 dB SPL
ドライバー、防磁シールド	205mm (8 in)
質量	8.5 kg
外寸	
高さ	300 mm
直径	362 mm

アンプセクション	
	F Two
アンプ瞬間出力 (長時間出力はドライバーユニット保護回路により制限)	150 W
アンプシステム THD (通常出力時)	≤ 0.05 %
電圧	100-240 VAC, 50/60 Hz
消費電力 (平均)	
スタンバイ	0.5 W
待機	11 W
フル出力	150 W

コネクター	
	F Two
アナログオーディオ入力 10 k Ω	
RCA	L, R, LFE
3.5 mmステレオジャック	1
デジタルオーディオ入力	
オプティカルTOSLINK	1
コアキシャルRCA 75 Ω	1
オーディオ出力	
XLRバランス	L, R
RCA	L, R, LINK

クロスオーバーセクション	
	F Two
サブソニックフィルター (18 dB/オクターブ)	27 Hz
クロスオーバー周波数 (サブウーファー / メインチャンネル)	85 Hz
LFE チャンネルカットオフ周波数	120 Hz
ミッドバンド除去 >400 Hz	≥ 50 dB
アナログ入力レベル (90 dB SPL 出力 @ 1 m)	-10 dBu, 最大レベルコントロール
デジタル入力レベル (90 dB SPL 出力 @ 1 m)	-21 dBFS, 最大レベルコントロール
デジタル入力ワード長	16...24 bits
デジタル入力サンプリングレート	32...96 kHz
感度調整範囲	18 dB
レベルDIPスイッチ	+10 dBおよび-10 dB
ベースロールオフコントロール動作範囲 (2 dB 単位)	0 ~ -6 dB @ 27 Hz
位相整合コントロール (90° 単位)	0 ~ -270 dB @ 85 Hz